



さいたまゴールド・シアター中間発表公演

“Pro·cess2”『鴉よ、おれたちは弾丸をこめる』

生活の中に演劇がある

昨年12月1日から4日まで彩の国さいたま芸術劇場 大稽古場で行われ、連日、満員御礼だった2回目の中間発表公演。

清水邦夫作『鴉よ、おれたちは弾丸をこめる』(構成演出:蜷川幸雄 演出:井上尊晶)を、さいたまゴールド・シアターの団員たちは、共演したニナガワ・スタジオなどの若い役者たちとの対比も見事に演じきった。そこにはこの半年の間での目を見張るような成長があった。

若者が演じた婆を、本物のお年寄りが演じる

呼子を合図に、武器を手にした三十人余の婆たちが流れ込んでくる。赤ん坊を背負つたもの、鍋からやかんから所持道具の一切合財を体に括り付けているもの……誰もが煮しめたような生活の匂いを撒き散らし、それまで整然と統制されていた法廷が一瞬にして席巻される。と同時に、客席も同様、婆たちの世界に否が応でも引きずり込まれる……。

昨年の5月から活動を開始した「さいたまゴールド・シアター」の第2回中間発表公演「Pro·cess 2」は、前半から観客の心を驚撃にした舞台だった。脚本は清水邦夫の名作『鴉よ、おれたちは弾丸をこめる』。この作品は1971年、アートシアター新宿文化で蜷川幸雄が35~6歳当時、演出し初演したもの。この脚本を今回選んだのは、お婆さんたちが複数登場する脚本だったこともあるが、「当時は緑魔子ら若者が婆を演じたが、本物の年寄りが演じたら、どういう変化が生まれるのか」という興味が蜷川にあったという。

いよいよ始まった役者としての試練

しかし、立ち回りもあり動きも大きいこの作品は、団員たちにとって初めてつくだった。まずはキャスティングからして初めての経験。前回の中間発表では、全員には平等にセリフが振り分けられたが、今回はそうはいかない。役を変え何度も繰り返された本読みが、アピールタイム。思わず彈けた個性を發揮し、蜷川を驚かせるものもいれば、完璧な暗記をいち早く披露し注目を浴びるものもいる。もともと脚本に書かれている主要なキャストは20名ほどだが、そこから漏れた人は、自らで新たな婆を個人史や人物像を交え創り上げた。こうして更に個性的な婆を加えつつ未曾有の婆軍団が出来上がったが、舞台に上がる人数が多くなるほど、立ち位置や段取りなどが複雑になり、セリフ覚えに加え難題を抱えることになる。何よりも難しいのは、そうした動きを確実にこなしていく中でも、役になりきり、役の感情を常に持ち続けることだ。誰かひとりでもウソになってしまふと、とたんに舞台は綻んでしまう。「殺人の顔だよ! きれいな顔なんかいない!」。開幕も近づき、蜷川の怒号にも焦りがにじむ。今回は



二人の婆の孫役をはじめ、ニナガワ・スタジオらの若い役者たちが数多く参加し、違う世代が交流し刺激しあうことで演技の上でも実りをもたらしたが、彼らの在り方は蜷川の戦術であったかもしれない。同年輩のさいたまゴールド・シアターの人には多少遠慮がちで言えないことを、代わりに彼らに言うことで伝えていたかにも思える。「下手な奴はどんどんはずぞ!」。オープニングを大幅にカットしたり、舞台の奥行きを狭めたり、音響や照明を変えたりと直前まで必死の改善が重ねられた。

技術やセリフを超える立ち上る生活史

こうして迎えた初日だから、終わった時の鳴り止まない拍手を聞いた時、誰よりも胸を撫で下ろしたのは、蜷川だったかもしれない。中盤では婆たちがとる突飛な言動に笑いが起き、クライマックスでは婆たちの中に蓄積された行き場のない憎悪に共感し、感動で涙する観客も少なくなかった。

「本当に感動しました。役者一人一人が年齢を積み重ねて来た存在感があって、立っているだけで胸に迫るものがありました」

(俳優・穂谷友子さん)



1~7 舞台写真、8~12 稽古風景。

1. 法廷を占拠した婆たち。2. 弁護士(手前右)や裁判官は人質に。3. 不出来な孫に思いの丈をぶつける鴉婆。4. たくましい婆たち。手前左からいわく婆、お祭り婆、三味線婆、はげ婆ら。5. かいせん婆(左)と三味線婆、虎婆の孫。6. 「わたしらが若者に蘇るしかない!」と、仲間を鼓舞する虎婆(左)と鴉婆。7. バニックの中で励ましあうノーバン婆(左)とおぼこ婆。8. 団員たちに語りかける蜷川幸雄(右)と演出の井上尊晶。9. 真剣そのものの団員たち。10. 小道具にも各人の工夫が凝らされている。11. 一人一人が自主練習にも真剣だった。12. 演技をチェックするため、ビデオに見入る団員たち。



「すごいもの観ちゃった。リアリティがありすぎますよ」

(俳優・吉田鋼太郎さん)

「それぞれが一人の人物として、芝居の中にちゃんと存在していて、あーこれが(さいたま)ゴールド(・シアター)だって嬉しくなりました」

(講師の一人、広崎うらんさん)

蜷川自身、「セミドキュメンタリー演劇かな」と言うように、老人が老人の役をやる時に、技術やセリフを超え、立ち上ってくるそれぞれの生活史が、この作品をよりリアルに身に迫るものにしている。「もっと生活の中に演劇があるということで、そういう意味では特権的な、稀な体験をしていると思う」(蜷川)。

公演は千秋楽まで5回。夢中で演じるうちにどこかをぶつける人や、緊張のあまり下痢や嘔吐がある人、開演直前まで点滴を受ける人がいたりと満身創痍だった団員たち。けれど、意気軒昂だ。

「これをやりおせたことは自信につながりますね」(団員)。

「シナリオを真剣に読み込んで、役になりきることで、人生まで変わってきた」(団員)。

今年6月を予定している本公演ではオリジナル作品に臨むという彼ら。その行く末をしっかりと見つめたい。

SAITAMA GOLD THEATER

photo:幸田 森 取材・文:鶴澤章子